

女性標示語「婦人」について

—65年間の新聞で見るその推移—

徐 微潔（筑波大学院生）

1. はじめに

「女性標示語」は徐（近刊）の命名で、職業や身分などを表す名詞の前にきて、そういう職業や身分を有している女性を表す「女」「女性」「女子」「婦人」「女流」などの呼称のことである。

「婦人」はかつて女性の一般呼称として、「女性標示語」の中で重要な位置を占め、「婦人」に家事は女中に任せ観劇や三越に出かけるハイクラスイメージがあった¹、「大人の女性へのある種の敬称であった²」と言われていた。しかし、現在では、「婦人」ということばがあまり使われなくなり、「女性標示語」としても新聞記事などから姿が消えつつあるように感じられる。

本発表では、『朝日新聞』のデータベースを利用し、1945年から2009年にかけての65年間の記事³を検索し、「婦人」のつくことば⁴を抽出した。そこで得られたデータと新聞記述から、女性標示語としての「婦人」の時期的推移と使用される複合語の様相を明らかにしたい。

2. 先行研究

女性標示語は1970年代から注目され始め、84年に田中和子によって「女性冠詞」と命名されたが、徐（近刊）によって「女性標示語」と再定義された。

女性標示語に関する研究はそれほど多くないが、性差別の視点とニュートラルな視点とに大別される。性差別の視点から女性標示語を性差別語として扱う代表的な先行研究としては、寿岳（1979）、田中（1984）、田中・諸橋（1996）、佐竹（2001）が挙げられる。一方、ニュートラルな視点から女性標示語を論じたものには、徐・房（2010）、徐（近刊）がある。

上述のように、「女性標示語」全体を扱う研究はあるが、個別の女性標示語を課題として取り上げた研究は、管見の限りまだ見当たらない。女性標示語「婦人」の時期的推移、使用される複合語の様相は十分に解明されなく、更なる考察が必要であると考えられる。

本発表では、女性標示語の使用が女性に対する一種の差別と偏見などの先入観を排して、ニュートラルな視点から、新聞における女性標示語「婦人」の時期的推移、使用される複合語の様相などを検討していくことを目的とする。

3. 女性標示語「婦人」の年別件数、「婦人」の年別件数

過去65年間の『朝日新聞』における女性標示語「婦人」の年別出現件数、「婦人」ということ

¹『朝日新聞 朝刊 2008.2.28』

²『朝日新聞 夕刊 1998.6.9』

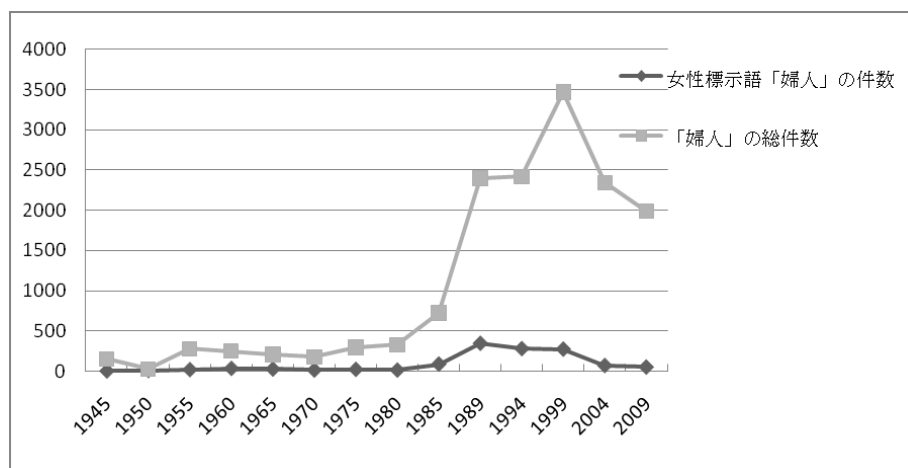
³調査期間は1945年から2009年にかけての65年間であるが、新聞記事の膨大な量を考慮して、1945年から1985年までと1989年から2009年までを5年ごとに区切り、該当する年の記事1年分を調査対象とした。

⁴「婦人教室」「婦人団体」「婦人用品」などのことばは「女性標示語」の定義と一致しないため、除外する。なお、「婦人少年局長」「婦人労働課長」「婦人室長」などは一見類似しているが、それぞれ「婦人少年局長」「婦人労働課の課長」「婦人室の室長」を意味しているため、対象外とする。

ばの年別件数と全体の構成比を【表 1】、【図 1】にまとめた。

【表 1】女性標示語「婦人」の年別件数、件数、全体の構成比⁵

	年別	女性標示語「婦人」の件数	「婦人」の件数	全体の構成比
戦後～昭和末期	1945	3	152	2.0%
	1950	9	27	33.3%
	1955	19	279	6.8%
	1960	34	250	13.6%
	1965	27	204	13.2%
	1970	14	177	7.9%
	1975	22	299	7.4%
	1980	14	328	4.3%
	1985	88	722	12.2%
平成元年～現在	1989	344	2394	14.4%
	1994	278	2417	11.5%
	1999	272	3470	7.8%
	2004	70	2342	3.0%
	2009	51	1988	2.6%
合計		1245	15049	8.3%



【図 1】「婦人」の年度別出現数

上掲の【表 1】と【図 1】が示すように、女性標示語「婦人」は、終戦の 1945 年に 3 件、5 年後の 50 年に 9 件、55 年に 19 件、89 年までは多少の増減を繰り返したが、徐々に増加する傾向

⁵1945 年～1984 年までは『朝日新聞縮刷版』しか使えないので、1989 年～2009 年までに比べ、新聞紙面の分量が随分違う。

が見られる。そして、平成元年の1989年に344件でピークを迎えるが、その後、次第に減少していく。以下では、戦後～昭和末期（1945～1985）と平成元年～現在（1989～2009）に二分して考察していく。

3.1 戦後⁶～昭和末期（1945～1985）

女性標示語としての「婦人」は1945年の『朝日新聞』の記事に「婦人連絡員」、「婦人記者」と「婦人部隊長」の3件が現れたが、いずれも戦争と関わっている。

- (1) 食糧増産に婦人連絡員（見出し）⁷（朝刊 1945/4/11）
- (2) 進駐軍と共に本土に上陸した数多くの新聞記者の中に二人の婦人記者がまじってゐる。
（朝刊 1945/9/8）

1950年代に入ってから、「婦人」の出現件数が微増し、「婦人」のつくことばの種類も豊富になってきた。女性が参政権を獲得⁸し、選挙に参加することによって、女性が家庭主婦の役に満足できなくなり、かつて男性に独占されたあらゆる政策決定部門に進出し、「婦人議員」「婦人大臣」「婦人自衛官」「婦人刑事」などのような新しいことばも時運に応じて現れた。

- (3) 婦人議員が地方議会で受持ってきた活動は教育、社会福祉、厚生、婦人の地位の向上といったものが多かった。
（夕刊 1955/4/1）
- (4) 全国初の婦人刑事が警視庁に生まれ、犯罪捜査の第一線についてからちょうど一年。
（朝刊 1960/8/9）

1970年から1980年の間に「婦人」の出現件数の微減も見られたが、85年は80年の14件の6倍以上の88件と急増した。それは、新聞のページ数の増加や国際婦人年の10周年にあたる1985年に成立した『男女雇用機会均等法案』と『女子差別撤廃条約』が、これまで当然視されてきた「男は仕事、女は家庭」という伝統的な役割分担意識をさらにゆらがせたからであろう。

1985年2月24日の『朝日新聞』に「婦人」改め「女子」に 差別撤廃条約の呼び方、政府が変更」と題する記事が載り、「婦人」を「女子」に改める動きが見え始めた。

二十三日の衆院予算委員会で、社会党の井上一成氏が唯一の女性閣僚、石本環境庁長官に「女子と婦人と女性の違いを教えてほしい」と迫った。

ことの起こりは、政府が今国会から急に「婦人差別撤廃条約」の呼び方を「女子差別撤廃条約」に改めたこと。これまでは「婦人」で通し、外務省条約局に昨年二月設置された準備室も「婦人」を冠していたのに、一月二十五日の政府四演説から「女子」に変え、準備室も二

⁶厳密に言えば、戦後は1945年8月15日以後のことであるが、本発表では、1945年1月1日以後を戦後とする。また、1989年の年始からの7日間は昭和64年で、1月8日以降の358日が平成元年であるが、本発表では、便宜上1989年1月1日からの365日を平成元年とする。

⁷本発表で挙げる用例は全て調査期間内の『朝日新聞』の記事からのもので、便宜上、「朝日新聞」の四字を省略し、朝夕刊と期日だけを記すことにする。なお、下線は筆者によるものである。以下同。

⁸日本の女性が参政権を獲得したのは、戦後の1945年12月に制定された新選挙法によってである。翌1946年4月に総選挙が行われ、39人の女性国会議員が初めて誕生した。

月五日付で「女子」に切りかえた。……（後略）（朝刊 1985/2/24）

このように、1985年の新聞記事に「婦人」を「女子」などに改める動きは見られるが、すぐに定着したわけではないようである。

「女子と婦人と女性はどう違うのか」。衆院予算委員会で先週末、用語問答があった。

……（中略）

いま、婦人と女子と女性の表現は、あちこちで入り乱れて使われている。ことし最終年を迎えた「国連婦人の十年」の場合は、どうするのか。用語の変更ひとつにも、その国の現状を垣間見る思いだ。……（後略）（社説 1985/2/27）

3.2 平成元年～現在（1989～2009）

平成元年（1989）は「婦人」の出現件数が最も多く、344件に達し、「婦人」のつくことばも多種多様である。しかし、1980年代の半ばに起きた「婦人」を「女子」や「女性」に変更する動向が、80年代末になっても変わらず、役所の世界まで少しずつ広がっていった。『朝日新聞』1989年4月8日に「役所の課や政策の名前、「婦人」から女性へ 看板ぬりかえ急ピッチ」との見出しでこの動きを伝えている。

使いなれた「婦人」という名称を「女性」に改める動きが、お役所の世界で少しずつ広がっている。「赤ちゃんからおばあさんまで幅広く取り込みたい」「イメージもいい」などが、その理由。京都府庁には、都道府県では初めて「女性」の2字を織り込んだ課が近く発足する。

「肝心なのは名前より内容」との声もあるが、看板ぬりかえは、婦人行政の長期プランや各種施設にまで及んでいる。（朝刊 1989/4/8）

1990年代に「婦人」の出現件数が減少しつつあり、2000年代に入り、出現件数が二桁に激減した。これは、90年代になって、「婦人」を「女性」に改める動向が一層強まり、「婦人」から「女性」への流れがほぼ定着するようになったのも一因であろう。

(5) 既婚者というイメージもある「婦人」よりも、「女性」を使うことが定着してきている。

労働省が婦人局を女性局に改めたのが一九九七年。警視庁も六月から、婦人警宜を女性警宜と呼ぶことになった。（朝刊 1999/6/4）

(6) 日本婦人科学者の会（現・日本女性科学者の会）の初代会長を務めた。

（朝刊 2009/10/14）

4. 女性標示語「婦人」を含む複合語

「婦人服」「婦人科」「貴婦人」など、「婦人」で作られた複合語・派生語が少ないが、本発表は女性標示語としての「婦人」が他の名詞と結合した語のみをしてみる。

4.1 「婦人」が漢語と結合した語

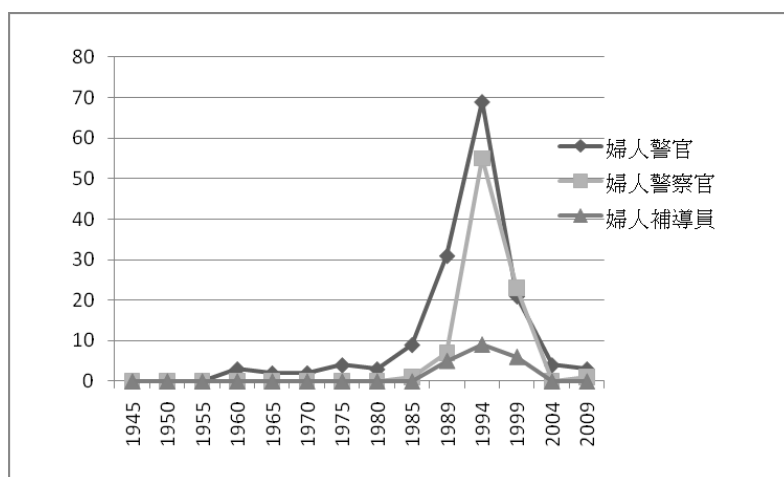
ここでは、「婦人」が漢語と結合した複合語、出現頻度上位20語を拾い上げ、下記【表2】に整理してみる。

【表 2】「婦人」が漢語と結合した語

順位	語 例	件数	順位	語 例	件数
1	婦人部長	214	11	婦人自衛官	12
2	婦人会長	183	12	婦人教職員	12
3	婦人有権者	153	13	婦人候補	11
4	婦人警官	151	14	婦人客	8
5	婦人警察官	87	15	婦人発明家	7
6	婦人会員	50	16	婦人代議士	6
7	婦人議員	39	17	婦人労働者	5
8	婦人記者	22	18	婦人科学者	4
9	婦人補導員	20	19	婦人首相	4
10	婦人相談員	14	20	婦人校長	3

女性標示語は漢語と結合するのが一般的で、今回の調査では、漢語と結合した語は 1227 件あり、全体の 98.6%を占めている。【表 2】が示すように、「婦人」のつくことばは「首相」「議員」「候補」などの特別職や「部長」「会長」「校長」などの管理職、「教職員」「記者」「労働者」などの一般職にまで及んでいる。

これらの語は毎年同じ頻度で出現するのではなく、年代でそれぞれ異なる。また、ある力によって強かにリードされて変化する場合もある。以下、「婦人警官」、「婦人警察官」、「婦人補導員」の 3 語の年別出現数を【図 2】に示し、その推移を見てみる。



【図 2】「婦人警官」などの 3 語の年別出現数

1946 年 4 月 27 日女性の警察官が初めて警視庁に採用されたが、新聞記事に「婦人警官」が現れたのは 14 年後の 1960 年である。80 年代の半ばから 99 年までは「婦人警官」と「婦人警察官」の出現件数が多かったが、1999 年に「脱「婦警）」という動向に伴い、2000 年代になって出現件数が激減し、新聞から姿を消していく。また、「婦人補導員」も 1999 年に「少年補導職員」に改めてから、調査期間内の 2004 年と 2009 年の出現件数はいずれも 0 件である。

(7) 少年からの電話相談などに乗る「婦人補導員」も、「少年補導職員」と呼ぶことにしている。また、特に性別が必要な場合には「女性警察官」などとするという。

(朝刊 1999/3/4)

(8) 警視庁は六月一日から、「婦人警察官」の呼び方を廃止し「女性警察官」、あるいは男女を区別せず「警察官」と呼ぶことにした。……(中略)

すでに全国二十六府県の警察本部が「婦人警察官」を廃止している。

(朝刊 1999/5/24)

4.2 「婦人」が外来語と結合した語

「婦人」が外来語と結合した複合語は少なく、65年間(14年)でわずか7種類18件しか収集できず、全体の約1.4%であった。

【表3】「婦人」が外来語と結合した語

順位	語例	件数	順位	語例	件数
1	婦人ボランティア	11	5	婦人ピアニスト	1
2	婦人パート	2	6	婦人パートタイマー	1
3	婦人リーダー	1	7	婦人ハイカー	1
4	婦人アナ	1	8		

漢語と結合した複合語に比べ、「婦人」が外来語と結合した複合語は数が少ない。これは、「婦人」が漢語形態素でそもそも外来語とくっつきにくく、漢語と外来語との間でイメージの「ゆれ」があるからであろう。

5. 女性標示語「女性」との比較

ここでは、「婦人」の推移をより明らかにするため、近年、女性標示語として優位を占めつつある「女性」との比較を行う。下記の【表4】と【表5】は【表2】と【表3】に照らしてまとめたものである⁹。

【表4】 女性が漢語と結合した語

順位	語例	件数/総件数	順位	語例	件数/総件数
1	女性客	1305/1349	11	女性警官	52/53
2	女性議員	820/834	12	女性教職員	38/38
3	女性候補	791/806	13	女性科学者	36/42

⁹ 【表4】と【表5】の順位は【表2】と【表3】に並べられた語例の「婦人」を「女性」に入れ替えたことばの実際の順位で、「件数/総件数」欄では、件数は1989～2009年の20年間の出現数で、総件数は1945～2009年の65年間の出現数である。

4	女性記者	249/265	14	女性首相	35/41
5	女性警察官	223/223	15	女性相談員	34/34
6	女性部長	194/196	16	女性会長	28/30
7	女性会員	143/149	17	女性自衛官	22/22
8	女性労働者	94/103	18	女性代議士	19/21
9	女性校長	92/95	19	女性補導員	1/1
10	女性有権者	64/65	20	女性発明家	1/1

【表 5】 女性が外来語と結合した語

順位	語 例	件数/総 件数	順位	語 例	件数/総 件数
1	女性ボランティア	63/63	5	女性ピアニスト	25/26
2	女性リーダー	43/44	6	女性パートタイマー	3/6
3	女性アナ	33/37	7	女性ハイカー	2/3
4	女性パート	25/28	8		

上記の【表 4】と【表 5】から分かるように、「女性補導員」「女性発明家」などの語を除いて、総じて「女性」のつくことばは「婦人」のつくことばより遥かに多い。「婦人」は外来語との組み合わせが極少量なのに対して、「女性」は漢語のほか外来語ともよく結合する点で「婦人」と対照的である。また、「女性」のつくことばは戦後から昭和末期まではあまり出現しないが、平成期になってからは急に増えていき、「婦人」が「女性」に置き換えられ、代表的な女性呼称の座が第に「女性」へと移っていく。

- (9) 昔は女性アナウンサー同士でたまに旅行に出かけたり、食事に行ったりした。女性アナ同士でなければ分からない悩みなど話しあえて楽しいものだ。(朝刊 1989/12/16)
- (10) 健康ブームや女子マラソンブームを背景に雑誌やテレビで女性タレントを起用したランニング特集が増え、女性ランナーが増加。(朝刊 2009/10/16)

6. まとめと今後の課題

本発表では、1945年から2009年までの『朝日新聞』の記事に現れた女性標示語「婦人」を調査し、考察した。考察した結果、以下の4点が判明した。

- 1、戦後から昭和末期にかけては、「婦人」は多少の増減を繰り返したが、徐々に増加している。平成元年(1989)から現在(2009)までは、平成元年はピークを迎え、それ以降は次第に減少していき、「婦人」を「女性」に置き換える動向が広まってきた。
- 2、「婦人」は漢語と結合した語が圧倒的に多いが、外来語と結合した語も少数ながらある。それは、「婦人」が漢語形態素でそもそも外来語にくっつきにくく、漢語と外来語との間でイメージの「ゆれ」があるからだと考えられる。

3、「婦人」に関するイメージの変化や女性の職場進出などの関係で、今後も、女性標示語「婦人」の使用が減少しつつあると思われる。

4、言語と社会は切っても切れない関係にあり、お互いに影響しあいながら変化するが、両者の変化は同時並行的に進行するわけではない。

本発表では、「婦人」の歴史的推移と使用される複合語の様相を中心に見てきたが、年代別に分けて「婦人」に関する意識調査を行う必要もあると思う。これは今後の課題として検討したい。

参考文献

- 漆田和代(1993)「「婦人」「女」「女性」…一女の一般呼称考」『おんなと日本語』有信堂,123-158
- 遠藤織枝(1997)「女性を表わす語句と表現—新聞の人物紹介と雑誌広告の欄から—」『女性語の世界』明治書院,94-113
- 岡野雅雄(1996)「政治面におけるジェンダー・バイアス」『ジェンダーから見た新聞のうら・おもて「新聞女性学入門」』現代書館,131-157
- 鹿野政直(1989)『婦人・女性・おんな—女性史の問い—』岩波新書
- 佐竹久仁子(2001)「新聞は性差別にどれだけ敏感になったか」『女とことば』明石書店,162-170
- 佐竹秀雄(2001)「女性冠詞の根本問題は解決していない」『女とことば』明石書店,73-79
- 寿岳章子(1979)『日本語と女』岩波新書
- 徐微潔・房極哲(2010)「日中両言語の語彙に現れる性差について」『日本語教育』(韓国)6月号,81-94
- 田中和子(1984)「新聞にみる構造化された性差別表現」『マスコミと差別語問題』明石書店,179-201
- ・諸橋泰樹(1996)「新聞は女性をどう表現しているか」『ジェンダーから見た新聞のうら・おもて「新聞女性学入門」』現代書館,38-80
- 田中克彦(2001)「「オンナ」で考える—サベツ語と語彙の体系性」『差別語からはいる言語学入門』明石書店,56-62
- 広井多鶴子(1999)「「婦人」と「女性」—ことばの歴史社会学」『群馬女子短期大学紀要』(25),121-136
- 林玉恵(2006)「日本語彙に見る性差別語」『台湾日本語文学報』12月号,291-316
- れいのるず・秋葉かつえ(1998)「日本語の性差別」『「ことば」に見る女性』東京女性財団,214-232
- 徐微潔(近刊)日語中“女性標示語”使用現状考察——以《朝日新聞》的报道为例《日语学习与研究》

資料

朝日新聞(開蔵Ⅱビジュアル)